

一般財団法人日本アジア振興財団（J A P F）

2015 年夏期インターンシップ論文集

期間：カンボジア 2015 年 8 月 30 日（日）～9 月 6 日（日）

対象国：カンボジア王国

参加人数：23 名

男女割合：男 5 名、女 18 名

日本国籍者：23 名

参加大学：大阪大学、関西大学、阪南大学、津田塾大学、武庫川女子大学、近畿大学、同志社大学、京都女子大学、香川大学、法政大学、兵庫県立大学、奈良県立大学、早稲田大学、東京外国語大学、中央学院大学、広島修道大、九州大学

帰国後の活動：（関西での修了式及び事後研修会）

日時：9 月 24 日（木）14：00～15：00

場所：在大阪カンボジア王国名誉領事館、大阪市

（東京での修了式及び事後研修会）

日時：9 月 17 日（木）12：00～14：00



一般財団法人 日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

発行：一般財団法人 日本アジア振興財団学生委員会

カンボジア研修を終えて

早稲田大学 政治経済学部 経済学科 3 年

「カンボジア＝アンコールワット」。これが以前の私のカンボジアのイメージでした。それ以外にこれといって知識がなかった為、少し調べると、そう遠くない過去ポルポト政権において大量虐殺が起こったという、大変悲しい過去があることを知りました。そしてこの影響は私が予想していた以上に、現在まで色濃く影響を与える本当に恐ろしい物だったという事を研修先でひしひしとを感じる事となります。

当初私が抱いていたイメージのように、アンコールワットは、国旗にも描かれカンボジアにとっては無くてはならないとても重要なものです。またアンコールワットのみならず、アンコール遺跡群、豊かな自然等、観光資源が豊富でまだまだ観光業は大きなポテンシャルを秘めている事が分かりました。いうなれば、観光業はカンボジアの得意分野で主要な産業の一つです。よって確かに国力、経済力をつける手段としては有効だと思います。しかし、観光業とは外貨に頼る、という事です。将来的にもカンボジアは外貨に頼らない自国の産業が必要だと感じました。また、観光業には今まで私が思ってもみなかった問題点が含まれていました。それは“貧しい国”が観光資源になり得る現実です。カンボジアは東南アジアの最貧国として知られ、NGO が一番多い国となっています。孤児や農村が“観光資源”になる為、あえてその現状を維持する。ボランティアの中には、実は現地の人々にあまり役立っている訳ではなく、ある種の自己満足の対象、カンボジアにとっては単に外貨を得る事になってしまう可能性もある。考えても見なかった出来事でした。これらは、私達がカンボジアという国を、貧しい国、可哀想な国、そんな上からの視点で見ることで起きてしまうのではないのでしょうか？よくボランティア活動についての批判として、押しつけの支援ではないのか、結局偽善にすぎないのではないかと、といった意見を聞きます。それらが正しいとは言いませんが、少なくともその行動がどんな影響を与えるのかという事を同じ視点で慎重に考えなければならぬ、という事を改めて実感させられました。

ポルポト政権時の大量虐殺の大きな爪痕、それは知識不足だと研修中至る場面で感じました。多くの知識人が虐殺され、資料なども処分されポルポト政権はカンボジア人の知識、思考力を奪いました。研修中印象的だったのは質疑応答時、国がどうしてほしいとか庶民には分からない、というような意見を度々聞いた事です。だいたい海外のお金で学校や病院、地雷撤去が成され、国はあまり関わっていない。しかし、そんな国が何をしているのかは、一般の人には全く分からない。こう聞くと、私達は政府に訴えて、国を変えようとすれば良いのでは、と民主主義的な発想を当然のように思いますが、カンボジアの人々はそうではなく、どこかあきらめているような印象を受けました。問題が途方もない事も一要因ではあると思いますが、そもそも民主主義的な考えがないのではないのでしょうか？思い返してみると、私達は子供の頃から、様々な場面で民主主義的な考えを教育されてきています。教育は人々の思考の仕方を大きく左右し得るもので、その機会を完全に奪ったポルポト政権はなんと効率的に、そして今なお影響を与え続けているひどく恐ろしいことをやってのけたのだろう、と衝撃を受けました。トゥールスレーン収容所の生き残りの方の「指導者、リーダーを信じる前に、きちんとその人が何をしようとしているのかを聞き、自分で考えなければならない」という言葉。この言葉が二度とあのような惨劇を引き起こさない為の本当に大切なことなのだと、重く響きました。

これからのカンボジアは、教育・国力をつける事に増々力を注ぎ、自立していく力をつける事がなにより必要とされていると思います。では、私達にできる事は何なのでしょう。JST 代表のチア・ノルさんは、ポルポト政権から逃れて“平和な国”“日本へやってきました。しかし“平和な国”であるはずの日本ではいじめに大変苦しんだそうです。日本からたくさんの人、NGO がカンボジアへ支援に行き、日本＝優秀な国、カンボジア＝問題を多く抱える国 という図式が一見成り立ってしまっているように感じますが、問題を抱えているのは決してカンボジアだけではありません。驕り、優越感等は決して持つてはいけません。勘違い

してはいけません。それぞれの問題をそれぞれで、時には世界全体で、解決し、より良い社会を目指していかなければならない、という事を強く思いました。

「カンボジアスタディーツアーに参加して」

中央学院大学 法学部 法学科 1 年

普段ほとんど意見を言うことをしない私だが、カンボジアスタディーツアーに参加して、意見を言い合うということに少し楽しさを感じた。しかし、関西の方が多かったのではなかなか意見が言えず、もっとはっきりしないといけないなと思った。

私はこのスタディーツアーに参加して、簡単には答えが出ない課題について考えることができた。「日本の支援は押し付けになっていないか」、「観光業に力を入れることによって起こるメリット・デメリット」、「ゴミ山をなくした方がいいのか」などいろいろなものがある。その中でも私が一番印象に残っているのは、「観光業に力を入れることによって起こるメリット・デメリット」である。

観光客が増えることによって起こるメリットは、観光地の経済が活発になり良くなる、知名度が上がるなどたくさんある。しかし、私はデメリットのついて深く考えてみた。

1. 都市部と地方・農村の間に貧富の差が生まれることである。観光地としてたくさんの人が都市部に集まると、その地域はお金が入り経済が良くなる。だが、地方・農村には観光客が来るとしても都市部並みには来ない。したがって、あまりお金が入ってこないで自給自足のよう形になる。そうすると、都市部と地方・農村との間に貧富差が生まれてしまうと考えた。
2. 観光地の環境・生態系が壊れることである。ほとんどの観光客は外国人なので、生活習慣が違ったり、価値観が違ったりする。そうすると、その土地の固有の文化などが失われていってしまうと考えた。今は、エコツーリズムがあるが、世界中の誰もがその土地の環境・文化などを守ろうとするかどうかと言われたら全員が守ろうとするわけでもない。だから、私は、エコツーリズムはやめた方がいいと考える。

ただ、この二点以外にもデメリットはあるだろう。しかし、この意見も個人の考えであるし全てが正しいとは言えない。やはり、簡単には答えが出ない。

おそらくこのスタディーツアーに参加していなければ、このような課題を考えることは無かつただろう。たくさんの人から話を聞き、たくさんの場所に行き、たくさんのことを学べた。8日間と短い期間ではあったが、かなり充実できたと思う。このスタディーツアーに参加して本当に良かった。ありがとうございました。

「カンボジアで感じたこと」

東京外国語大学 国際社会学部 東南アジア地域専攻 2年

現在、今後の経済的発展が期待されている東南アジア諸国の中で、最貧国と認識されているカンボジア。どうすればもっと他の国みたいに豊かになるのだろう、日本にできることはなんだろう、といった考えを私たち日本人はカンボジアに対して持っていると思います。私もこのスタディツアーに参加する前はそうでした。しかし、実際にはその考えは日本人による勝手な価値観なのではないかと、今回カンボジアに行って思いました。以下でその理由ともなる、私がカンボジアで感じたことについて書きたいと思います。

まず、価値観の違いを最も感じたのがゴミ山、農村部で暮らしている方のお話です。私たち日本人はすぐにでも帰りたいと感じるゴミ山に、毎日働きに来ている人、電気や水道も通っていないくて不便そうに思われる農村で、自然の中で笑顔に溢れて暮らしている人。特に農村の子どもたちの元気の良さには驚かされました。人にはそれぞれの生活スタイルがあって、たとえ電気や水道が通ってなくてもそれに代わる手段をもっていて、それが彼らには当たり前でカンボジアの文化であるのだとわかりました。それに対して不便そう、かわいそう、と感じるのは私たちの価値観だけで、実際は違うのだと思いました。

次に、カンボジアで日々過ごしていて少し驚いたことの一つとして、各国、特に日本からの支援が所々で感じられたことが挙げられます。日本の支援により作られた橋、日本人が起業したカンボジア人を雇用する企業、各国からの支援による HIV 患者への薬など、たくさんの支援を目にし、カンボジアが被支援大国であることを実感しました。TAYAMA 日本語学校では、なぜ日本語を勉強するのかという質問に、「日本人と働きたいから」「日本企業だと稼ぎがいいから」という答えを返す人が多かったです。ここから必ずしも日本の支援が押し付けではなく、求められているものでもあるのではないかと感じられました。

このようにたくさんのものを見て、たくさんの人と出会って、カンボジアに対する日本の価値観や支援は実は身勝手なもので、カンボジアは他国の支援によって変わる必要がないのかもしれないという新たな視点を持ちました。しかし、子どもの栄養失調や労働問題など、文化だから仕方ないと片付けてはいけない問題があることも事実であり、日本人の勝手な価値観なのかもしれないけど、私はなんとかするべきなのではないかと思いました。どちらが正しいとは分からないけれど、どちらかに答えを決める必要はなくて、自分でしっかりと考えて自分なりの考えを持つことが一番大切なのだということもこのツアーを通してわかったことです。今までは考えても答えなんて出ないし、私に何かできる訳でもないと思って考えることを怠ってきたけど、たとえそうであってもやっぱり自分で考えられるって素敵なことで、純粹に楽しいと感じたので、これからは常に考えることを止めないようにしたいです。そして最後に、同世代の人たちと本気で考えて話し合ったことは本当に刺激になったし、一緒に過ごした8日間はとても楽しかったです。このような機会を与えてくださった方々に感謝します。

「カンボジアスタディツアーで学んだこと」

法政大学 人間環境学部 2 年

自分は以前から国際協力やボランティアに興味があり、「発展途上国」と呼ばれる国に一度行ってみたいと思っていました。その時はまだ何の考えもなく、とりあえず現地に行き、自分の目で実際に起こっていることを見て、体感して、良い経験を得られればという風にしか思っていませんでした。しかしこのスタディツアーを通して、自分だけでは得られることのできない貴重なことを学ぶことができました。それは「考え方」です。「価値観」という言葉でも言い換えられますが、つまり多角的な視点で物事をみるということです。感じ方は人それぞれ様々で、色々な人の意見を聞くことで自分の考えもより深まりました。特にこのツアー中に行ったディスカッションは意見交換の貴重な機会で、非常に勉強になりました。自分には思いもつかなかったようなアイデアを聞いた時に、自分の考えの浅さを感じました。また、先入観や常識にとらわれないように考えていたつもりでも、まだまだ捨てきれていない部分もあり、多角的な視点を持つことの難しさを実感しました。中でも、CIESF を訪問した際の引率者の「日本が行っている支援は日本文化の押し付けではないのか」という言葉は衝撃でした。カンボジアの教育の質を上げるために日本のやり方をカンボジアの教師に指導することはカンボジアらしさを消してしまい、もっと国民性を考慮すべきではないのかという指摘でした。教育支援はメリットしかなく、デメリットなんてあるわけないと思っていた自分にとって、改めて「価値観」を考えさせられました。そして、何でも鵜呑みにするのではなく、少し穿った見方も必要であることに気付かされました。表面だけでなく本質を見極めるためにも、多様な価値観、多角的な視点、穿った見方を用いて、これからも考え続けていこうと思います。

そして何より、今回実際にカンボジアに行ったことは非常に良い経験になりました。五感で学ぶこともやはり大切で、現地に行かないと分からないことや感じられないことがたくさんありました。今までメディアを通してしか知らなかったカンボジアでしたが、首都のプノンペンには想像以上に都会的で、物凄い数のバイクが行き交う光景に驚きました。

日本語学校の生徒さんたちは一生懸命勉強していて、まだ習って一年くらいなのに日本語がとても上手でした。みんな将来の目標をしっかりとっていて、その目標に向かって努力している姿を見て、妥協してばかりの自分の甘さを反省すると共に、これからもっと頑張ろうというやる気をもらいました。

ごみ山にいた子供たちは、友達と遊んだりしてそれなりに楽しい生活ができているから、自分たちが不幸だとは思っていないと言っていました。幸せとは何なのか。貧しいから不幸だと捉えるのは裕福な人たちの価値観でしかなく、裕福でも幸せだと思っていない人も中にはいると思います。幸せの基準は人類共通なのではなく、人それぞれによるのです。自分は今まで、途上国の貧しい子供たちをかわいそうだという目でみていましたが、ある意味それは偏見でした。そして改めて、現地の人との触れ合いの大切さを実感しました。

今回のツアーで得た経験を胸に、これからも学び続け、将来に繋げていきたいと思います。貴重な機会をくださり、本当にありがとうございました。

対等であるべき人間として思うこと

兵庫県立大学 経済学部 3 年

発展途上国。インフラは整備されておらず、識字率は低く、栄養状態は悪く、失業率は高く、数多くの人間が貧困に喘いでいる…。カンボジアの空気を吸うまで、そんなステレオタイプのみに囚われていたのかもしれない。

今回、JAPF のツアーに参加した理由は大きく分けてふたつある。ひとつに、私は大学で開発経済学を専攻している。そもそものきっかけはひとの役に立ちたい、国際協力に関心があるなど、嘘ではないが、そういう面の動機は人並みでしかないと自覚している。読書を通じて怒りを覚えたり、義憤にかられたりしたわけでもない。それは本当に些細なことで、途上国援助に対する経済学者同士の論争を知ったことがきっかけだった。学者によって言っていることが違う、一体何が本当に途上国の為になるのか。私たちは何をすべきで、しないべきなのか。カンボジアも所謂途上国のひとつだ。だから、現状を知ることでの今後の勉学の肥やしになると思った。もうひとつは、カンボジアが暗い歴史を抱えている国だからだ。内紛、戦争により、他国による重大な被害を受けた国はいくつもあるが、カンボジアは政府が自国民を虐殺した。高校時代、ほんの流した程度の学習だったがその特異性は印象深く、収容所やキリングフィールドを訪れることで、その悲劇の根底にあるものが何だったのか理解したかった。

私は、特に援助分野に関しては既に自分の中に解答を持っていて、その答え合わせに終始するだろうと考えていた。ポル・ポト政権下の経緯についても、実際に現場を見ることに意義があり、あとは補足的に知識を得られればよい…結局のところ、私は受け身の状態で出発した。だが、JAPF のツアーでは他の参加者との意見交換が盛んに促される。その中で、私は自分が真理だと思っていたことを疑うことができた。そもそもなぜ、「この国」に経済発展や支援が必要なのだろうか。本当にそれは求められているのか。カンボジアという国の歴史に興味を抱いておきながら、他方カンボジアを途上国という概念で縛りつけて抽象的にしか捉えようとしていない自分に気が付いた。大きな矛盾だった。

深く掘っただけの穴にシームリアップ中のゴミが何の処理も行われず集約されているゴミ山のこと、そんなゴミ山でゴミがどう扱われているのかあまり関心がないようにしか思えない政府のこと、危険で不衛生なゴミ山でゴミを拾って生活する人々の為に NGO が学校や病院を建て、それがまたコミュニティ化につながっていること…。実際にゴミを拾って生計を立てている人物に出会えなければ、その存在すら一度疑ってかかってから考えることのできるメンバーと共に議論を交わした。

また、帰国後この話を友人にした。彼は、カンボジアの政府は腐敗している、かといって性急に政策を進めても国民性故発展につながらないのではないか、という返答をした。「国民性」という物言いはなんだろう。私たちはたまたま先進国である日本に生まれ、たまたま少なくとも生活に不自由しない所得のある家庭で育ったというだけであって、私たち個人は先天的な能力があるわけでも、国の発展に寄与してきたわけでもない。なのに、どうして、発展途上国に対する目線が対等でなく、遅れた存在に対する軽蔑までは行かないまでも、同情混じりのものになってしまうのだろう。だが出発前の私もそうではなかったか。

対等という観点からは他にも考えさせられることがあった。カンボジアには支援により数多くの学校が建設されているが、肝心の教師は収入が必要最低生活費の半分しかなく、教師の職は兼業できる公務員として扱われている。カンボジアの教員養成校で、教員を目指す学生を教える教員に対して支援をする日本の団体の理念に、私は最初、無条件で賛成した。だが、メンバーとの意見交換を通じ、考えが及ばなかった面についても検討することが出来た。そもそも日本の方式は正しくて、カンボジアの方式は間違っているのか。カンボジアは何でもかんでも外国にやってもらわなければならないのか。その支援は本当にカンボジアの将来につながるのか。日本人スタッフはカンボジア人の教員や学生に対して対等な立場でいるか。一方がもう一方に何かを教えるという状況下で、対等さを保つというのは実はとても

難しいことなのかもしれないと感じたし、ある種の「揺るぎない信念」は価値観や倫理観を硬直化させることに繋がりがねないとも思った。硬直化が進んだ究極系がきっとポル・ポトなのだ。自らの正しさを盲信することは、相手を、いずれは自分をも滅ぼしかねない。ゴミ山で出会った少女は、自分は学校へ行けているし、家族と暮らせていて「幸せ」だと言っていた。私たち日本人からすれば立ち入ることすら信じられないような環境でも幸せだと感じている。それは「本当の幸せ」を知らないからこそなのか、それとも多様な価値観のひとつの表れなのか、あるいはまた別の理由なのかをよく考えなければならないだろう。

発展途上国はどうしようもない国ではなく、パワーを無限に秘めていて、今まさに、階段を登っている状態の国だ。舗装途中の道や街並みは実感を伴って私にそう感じさせてくれた。硬直化を招かないためには、その針路を逐一考えること。おそらくそれは、あらゆる場面において大切なことに違いない。

「カンボジアスタディツアー」

兵庫県立大学 環境人間学部 2 年

私にとってはこのスタディツアーが人生初の海外経験となりました。

現地に行ってみてまず思ったことは、実際自分の目で見ないと分からないこともあるということです。カンボジアは貧しい国だと思っていただけに、首都であるプノンペンの賑やかさには圧倒されました。バイクや自動車がたくさん走っており、通りには私も知っているような外資企業なども店を構えていました。一方で、小さな子どもが交通量の多い道路の中央分離帯に立ち、ドライバーにお金などを催促している様子も見かけました。街は発展しているはずなのに、貧しい人たちにまでその恩恵が行き届いていないところに、少しちぐはぐさを感じました。

ツアーのなかでお話を聞かせてもらった方々に関しても、その人や組織によって意見が全く違っていき、カンボジアの人々が求めているものと与えられているものが異なっているところもあるんじゃないかと思いました。外側から見ただけでは分からない内情や価値観を知ることは、とても大切なことだという気づきを得ました。

また、今回のスタディツアーではカンボジアの歴史と現状と未来について学んだことで、ある時代に起きたことが後世に残す爪あとの大きさを知りました。トゥールスレン収容所でポル・ポトの大虐殺の生き残りの方に話を聞きましたが、大虐殺が起きた本当の理由や原因を知りたいと仰っていたことが印象に残りました。実際その時代を体験した人にとってはまだ終わっていないことなんだということを痛感させられました。そして、大虐殺で多くの知識人が殺されたことによって、今の時代の教育にまで影響があり、現代のカンボジアの子どもたちが十分な教育を受けられないという現状に至っています。そういった歴史の流れを見ると、私たち日本人にとっても他人事ではないんだと思うようになりました。現代の日本でも、国民に選択が問われている場面が多いと思います。そのときに、しっかりと理解して自分の意思で選ぶことが重要だと感じました。

こういった自分自身の生活について考えられるようになったのは、このスタディツアーで得た経験のおかげだと思っています。私はディスカッションや人前で話すことが苦手だったのですが、毎晩ディスカッションをすることによってその苦手意識も薄れていきました。そして自分の意見を言うだけでなく、他人の意見を聞くことで幅広い視野を持てるようになったし、いろいろな角度から物事を見られるようになりました。

他人との意見交換という面でもうひとつ実感したことがあります。それは日本人以外の人とのコミュニケーションをとり方です。日本では日本語しか喋れなくても不自由しませんが、その他の国では英語での会話が主になります。今回私は英語ではほとんど喋ることができず歯がゆい思いをしました。だから、日本に帰ってきてからは『コミュニケーションとしての英語』をがんばろうと思いました。

このスタディツアーは参加する前に想像していたよりも貴重で有意義な体験となりました。今回学んだことや姿勢を無駄にすることなく、これから活かしていきたいです。そして、今までなんとなく生活してなんとなく大学に行っていたことを反省し、これからは身の回りの物事などにしっかりアンテナを立てて能動的に勉強していきたいと思っています。

カンボジアスタディツアーを通じて学んだこと

京都女子大学 現代社会学部 3 年

8 日間のスタディツアーを通じて、カンボジア王国の歴史や文化、教育、医療、環境、産業、観光、様々な視点からカンボジアの実情や問題点、課題を学ぶことができた。私は今回初めてカンボジアを訪れたが、これまでのカンボジアに対するイメージは、アンコールワットを始めとした観光業に力を入れている、様々な支援のために多くの日本人や学生が訪れている、というものであった。また、以前に観た葉田甲太作の映画『僕たちは世界を変えることができない。』の影響で、カンボジアに対してポル・ポト政権下の大虐殺や HIV、地雷といった多くの問題を抱えた「怖い国」「可哀想な国」のイメージがあった。しかし、実際にカンボジアを訪れると、やはり貧富の格差はすぐに見て取れるものの、人が暖かく笑顔が素敵で、日本のように時間と規則に縛られた生活とは真逆の自由で穏やかな生活を送る姿が印象に残った。

このツアーを通じて私が常にテーマだと感じたのは、「教育」である。企業や貿易振興機関、観光関連、HIV 病棟、日本語学校、歴史関連博物館、ゴミ山、遺跡、農村、一見どれも繋がりのないような幅広い立場の人々から話や考えを聞いたが、結局は「教育は必要であるか」といった問題に立ち返っていたように思う。また、それに対する支援のあり方についても常に考えさせられた。私は、カンボジアにとって教育は必要であると考え。なぜならば、教育によって生きる力を身につけることが出来ると考えるからである。確かに、「カンボジアの良さがなくなる」や「先進国の押しつけである」という意見もあると思うし、その通りだとも思う。しかし、現実カンボジアには他国からの支援が不可欠ほどの貧富の格差が社会問題となっており、カンボジアの安い人件費を目的に世界中の国々が企業進出を狙っている。国は観光に力を入れて地方にもインフラを整備しようと計画を推し進めていく中、今後ますます日本人を始めとした外国人が流入するであろう。こうした中で、この先もずっと支援や援助を外国に頼りっぱなしで、何も分からず安い賃金で労働力を搾取され続けることは、カンボジアにとって本当に良いことなのだろうか。教育といっても、算数や読み書きだけが出来ればよいということではないと思う。病気や衛生管理、何が危険でどういう所に近寄ってはいけないなど、生きていく上で大切なことを子供たちが学ぶ機会を作ることが重要であると感じる。学校という箱を作るのではなく、その中で働く職員や教育を支援することが求められているという話を伺ったように、本当に必要な支援を見極めて行動していくことが大切であると学んだ。また、農村で伺ったように、私たちが観光で訪れたアンコール遺跡群などに現地の子供たちの大半は行ったことがないという。教科書にはポル・ポト政権下の記述がまだ少なく、歴史の教訓を学ぶことが出来ない。貧しい子供たちは自分たちの住む地域から外に出ることができないという。私はこのツアーを通じて、カンボジアの美しい遺跡群や文化、産業にも触れることができ、カンボジアが大好きになった。そのため、特にカンボジアの子供たちには自分たちの国をもっと理解する機会が与えられてほしいと感じた。そうして愛国心や自国の理解を深め、いつの日にか外国の支援がなくても自分たちの国の未来を自分たちで決められる社会になることが理想だと思う。

わずか 1 週間ほどの研修で、さまざまな場所を訪れることができ、カンボジアへの理解を深めることができた。さらに、今後の支援のあり方について自分の頭で考え、毎晩のディスカッションを通じてメンバーのさまざまな感想や考えを聞くことができた。カンボジアの問題を考えていく中で、日本の平和問題やゴミ問題、貿易など自国の問題も浮き彫りになった。これからの学生生活、人生を通じて、どのような事に対しても、何が問題で自分に何ができるか、自分はどう考えるかを常に模索していきたい。

カンボジアで見た光景 2015 年 8 月 30 日～9 月 6 日

同志社大学 経済学部 経済学科 3 年

「開発途上国に行ってみたい。」初めはただ漠然とした気持ちでした。さらに観光も出来たらいいなという気持ちもありました。私は当初、バックパッカーで東南アジアを回ろうと考えていましたが、今回のスタディツアーに参加できて本当によかったと思っている。それはカンボジアという国の良いところだけではなく、悪い側面も垣間見ることが出来たからだ。ただバックパッカーとして旅行していたら、カンボジアの歩んできた歴史や、今現在の問題を他大学の様々な考えを持った人達とこんなに深く考えることは無かったと思います。

このスタディツアーで一番印象に残っているのは現地で見た子どもたちのことです。あちこちでたくさんの子供を見たが、みんな目が輝いていて毎日が楽しそうでした。特に印象に残っているのが、TAYAMA 日本語学校の同世代の子たちと、シェムリアップで訪れたゴミ山で話を聞いた子ども達です。日本語学校の生徒達は世界的にも難しいと言われている日本語を一生懸命私たちに通じるように話してくれました。そしてみんなそれぞれの夢に向かって勉強している姿に自分も頑張ろうと触発されました。ゴミ山で出会った子ども達には日本では考えられない環境に居ても、自分たちは不幸ではないと言っていたことに驚かされた。無数のハエが舞う中、ガードレールも無く整備もされていない、誤って落ちたら即死するであろう深く巨大な穴の前で彼らはこう言い切ったのだ。これは同時に私たちが、衛生的にも、ごみ処理のシステムにも恵まれていることが当たり前であるという前提が奇跡的なことであることを認識しました。生まれてこの方この前提がなかったらどうなっているのかなど考えたこともありませんでした。今自分がいる環境を今一度良く考えて理解しようと思います。

私は将来海外で働きたいと考えていますが、今回のスタディツアーでそれが本当に難しいことだと改めてわかりました。自分がまだ世界のほんの一部のことしか知らない未熟さ、小さくて甘い考えしか持っていなかったことを今回の旅で出会った方達に教えられました。

「無知は罪なり、知は空虚なり、英知持つもの英雄なり」という言葉があるように、知らなかったではいけないし、社会に生かして貢献できることを、考えることをやめずに自分の見聞を更に広げて行こうと思います。様々な体験が出来た今回の旅は一生忘れることは無いだろう。貴重な機会をありがとうございました。

「夢のような8日間」

香川大学 経済学部 地域社会システム学科 2 年

わたしがカンボジアで過ごした1週間は、わたしの今までの人生の中で最も早く、濃い時間であったと感じています。日本で過ごす1週間とは時間の流れがまるで違うようで、ほんの一瞬の出来事のようにでした。日本にいるときには体験できないような非日常と時間的感覚から、わたしはこの8日間を夢のようだったと捉えます。

このツアーに参加して最も驚いたのは、考えさせられることが物凄く多かったことです。毎日のディスカッションや引率の方から投げかけられるテーマによって、自分の予想以上にいろんなことを考え、学び、吸収できた気がします。

カンボジアで強く感じたのは、カンボジアの非カンボジア化と教育の不足およびカンボジア政府の不明瞭さです。カンボジアの非カンボジア化、というのはプノンペンのイオンやその周辺に行った時に強く感じました。イオンの中はそこがカンボジアであることを忘れてしまうくらい日本にあるイオンとそっくりな作りで、中に入っているお店も日本のものとあまり変わり映えのないものでした。周辺には東横インや見覚えのある家電用品店が立ち並び、このままではカンボジアが日本になってしまうと感じました。せっかくのカンボジアの街並みが失われているようで、それがとても悲しかったです。日本が明治時代に洋風化をし始め、着物を脱ぎ、昔からの町並みを失ったように、カンボジアも、カンボジア人が気づかぬうちにカンボジア要素を失っていくのではないかと思います。利便性を図ることによってどの国にいても同じ風景が望めることがわたしはとても嫌です。交通網が発達し、時間とお金さえあればどこへでも行けるようになった今、日本を含め、それぞれの国が自国の良さを生かした町並みやそこでしか作れない、見ることでできない町並みを意識的に残していかなければならないと思っています。なぜならその町並み自体が観光になりうるからです。直接観光客が訪れるという意味で、町並みという観光資源は輸送が可能な特産品よりも強いものであると思います。

また、このツアーで出会ったカンボジア人のほとんどが、お金について話していた事が印象に残っています。このツアーに参加したほかの大学生もこのことについては口にしていました、カンボジア人のお金への執着心を強く感じました。ひどい言い方かもしれませんが、「お金さえもらえればそれでいい」という根底にある考えが、今のカンボジアの足を引っ張っているように感じます。この考えを形成する原因や、ほかのこととも総じて、日本では全く理解していなかった教育の大切さについてとても考えさせられました。わたしがカンボジアで見た、聞いた問題の多くはすべて、教育か国のやり方に帰結するものだと感じました。

わたしはこのツアーに参加して、日本にいた時には気付かなかった多くのことに気づくことができ、自分の中に内在していた考えをよく知ることができました。ベタかもしれませんが、ここで出会った仲間や新しい価値観はわたしの宝物です。こんなに貴重な経験をすることができてわたしは幸せです。今の自分からしたら、まるで嘘のような、胸に突き刺さるような日々を、ありがとうございました。

「考えたこと」

広島修道大 学法学部 1 年

私は、ただただカンボジアという国を知りたくて今回のツアーに参加しました。なぜカンボジアなのか。きっかけは些細なことです、テレビで、ポル・ポトについての特集を見たのが大きいです。すぐ近くの、同じアジア地域なのに、私はポル・ポトという言葉さえ知りませんでした。そこで、ポル・ポト時代のカンボジアはもちろん、今、カンボジアはどういう国なのか漠然と気になったのです。

このツアーで私が一番考えたことがボランティアについてです。カンボジアに行く前、私がどうやって行こうか迷っていた時、調べていてよく目にしたのが「カンボジアに学校を建てよう」とか「井戸を掘ろう」などのボランティアをうたったツアーでした。私はカンボジアを知るという目的で調べていたのでそのツアーに魅力は感じませんでした、単純に「すごいな、こんなことするんだ」と思っていたのです。そして現地で知った日本人によるボランティアの現状。校舎はあっても先生の数が足りない、しかも親の手伝いなどで子供が学校に行けない。問題の核は別のところにあるのです。井戸掘りにしても、日本人は勝手に「カンボジアはお金がないから、技術がないから井戸を掘ることができないんだ」と思うのでしょう。実際は、掘っても泥水しか出ず使えないから掘っていない、あるいは必要最低限の井戸はもうすでに掘ってあるなど、ちゃんと理由があったのです。

日本の価値観をそのままカンボジアに持って来れば、日本より発展が遅れているという認識になります。最初は私もそうでした。でも私がこの目で見てきたカンボジアは活気があって、まぶしくて、楽しくて、何が遅れているのかわかりませんでした。本当にこの国にボランティアは必要なのでしょうか。

滞在中、カンボジアの陰の部分も学びました。孤児院やごみ山、物乞いをする子供までもが観光ビジネス化されているのではないかという疑念の存在です。私たちのような外国人が訪れることで、私たちにその気はなくてもそれらが観光地化され、自然とそこにお金が落とされていきます。ごくごく少数ではあるとは思いますが、私たちがカンボジアを知りたい、見たいという思いが需要となって、本当は孤児院はそんなにいないけど残しておいたりして、外国人が落としてくれるお金が途切れないように、海外からの支援が続くようにしているのかもしれない。

これまでいろいろ述べてきましたが、カンボジアの人たちがどう思っているかはわかりません。私たち外部の人間の考えすぎかもしれません。私自身、普段の生活の中で日本の諸問題なんてほとんど考えません。自分が生きるのに精一杯です。カンボジアの人たちは自分の目に見える範囲の生活が幸せならそれでいいと考える人が多いと聞きました。私はそれを自己中心的だなんて思いません。素敵だと思いますし、人間の性だと思います。今回のツアーで私は、価値観の違いを知るのは楽しいなと思いました。もちろん価値観の違いは時に争いを生みます。現存する紛争のほとんどが価値観の違いによるものでしょう。簡単なことではありませんが、少しずつでも、いろんな国の人々が考え方を言語化して述べて、お互い受け入れようとする姿勢があれば、にらみ合いはあっても殺し合いは無くなると思いました。

私には今、もっともっといろんな国に行っているいろんなことを知りたい、考えたいという欲があります。金銭的にもそれは簡単ではありませんが、どんな考え方にも染まらない覚悟をもって、常に新しい気持ちで学んでいけたら、思考を止めずにいられたら、それほど幸せなことは無いと思います。このツアーでそんな夢ができました。多くの考える機会をありがとうございました。

カンボジアスタディツアー

近畿大学 総合社会学部 2 年

カンボジアは私が思うより貧しくない国だと思いました。思ったより車が走っていて、思ったより笑顔、活気があって、ご飯は思った通りでした。貧しいにも色んな捉え方があり、金銭面では確かに貧しい人が多いのが現状ですが、心の意味では日本より遥かに豊かだと感じました。

このツアーを通してカンボジア政府への疑問が大きくなったように思います。アキラさんが運営している地雷博物館では展示物を政府に奪われて国の博物館に展示されたそうです。ゴミ山では政府に流れるお金の方が多いと聞きました。そして観光業や娯楽施設に多大なお金を使っています。私が思う限りでは、カンボジアの政府は国民よりもお金とお金を落としてくれる観光客集めが優先になっているのではないのでしょうか。国民全員が豊かであり孤児もいない、ゴミ山もない世界を目指しているとは私には到底思えなかったです。それなのに政府はゴミ山で生活する人々への偏見を持っているそうです。全体的に思うことは大事なところに手を付けずに、いらない所で張り切るのだなということです。しかしこれも多角的に考えることが出来てないというのもあるかもしれません。しかし一個人としては、考え始めると政府への疑問が止まらないです。

また命について考えさせられることが多かったように思えます。戦争や虐殺などの目を背けたくなるイラストや写真を拝見し、実際の拷問で使用していた部屋に入ったのですが、平和ぼけ状態の私ではつい最近までこんなことが行われていたこと自体が理解出来ずに言葉も出てこなかったです。ただ本当に恐怖という感情しか生まれなかったです。

ディスカッションでは私は“昔は命が軽く扱われている、今は重く扱われている”という考えでしたが、誰しも大事な人の命は重くて大事なものであり、時代は関係ないと意見している女の子がいてその通りだと思いました。自分にはない色んな人の意見が聞けるディスカッションは大変勉強になりました。

この経験を活かせるかはまだ分かりませんが、確実に自分の成長には繋がりました。大学の講義の関心の幅も広がり、より世界に興味を持ちました。このスタディーツアーはただ何となく大学生活を過ごしていた私には自分を変える大きな一歩になったと思います。

「カンボジアスタディツアー」

大阪大学 文学部 1 年

私がこのツアーを通して学び、これからの人生に生かしていきたいと思ったことは 3 つある。歴史を学ぶこと、思ったことを言葉にすること、自分のものさしではからないこと、である。

まず、歴史を学ぶことについてだが、その重要性を感じたのはトゥールスレン収容所、キリングフィールドに行った日だった。その日までは、ただ単にポル＝ポトは大虐殺をした悪い人だとしか考えたことがなかった。しかし、ポル＝ポトの原始共産主義の思想を知るとその思想自体には共感できる自分がいた。というよりも、自分の中にポル＝ポトに似た思想があった。だから、自分はたまたまポル＝ポトよりも後の時代に生まれて、ポル＝ポトの失敗から学べただけであって、自分の生まれた時代がちょっと違っていたら自分が大虐殺を行っていたかもしれない。また、ポル＝ポト時代の、トゥールスレンからキリングフィールドへの連れて行き方が、ナチス時代の、ホロコーストの手口と似ていると思った。知識人はみんな虐殺されていたから仕方ないかもしれないけど、カンボジアの人たちがナチスのことを勉強していれば、もしかしたらキリングフィールドに連れて行かれることに気づけたのでは、と思った。この 2 つの思いから、歴史を学ぶことが重要だと改めて感じた。

次に、思ったことを言葉にすることについてだが、その重要性を感じたのは HIV 病棟に行った後や、トゥールスレン収容所、キリングフィールド、ゴミ山など、一般的に行くとショックを受けると言われている場所に行ったときだった。特に、その中で初めて行った HIV 病棟から帰ってきてバスに乗って感想を聞かれたときに言葉が出なかった。初めて言葉が出ないという状態に遭った。何を感じていたのか自分でもわからなかった。何も感じられていなかったのかもしれない。そう思うと、感じたことや思ったことを言葉にしなければ、何も感じてないのと同じだと思った。だから、思ったことを言葉にすることを普段から意識して練習していこうと思った。

最後に、自分のものさしではからないことについてだが、それは毎晩のディスカッションで特に感じたことだった。ツアーの最初の方では、カンボジアの教育についてこうあるべきだ、などと思い、自分の中ですぐに結論を出しがちだった。でも、日ごとにディスカッションを重ねていくうちに年齢も違って今までの経験も違う人々の意見をたくさん聞くことができ、どんどん深く考えることができるようになっていき、単純に自分のものさしだけで物事をはかって結論を出してしまってはだめだと気付いた。ツアー後半は常にこれは自分の押しつけかもしれないと頭の隅に置きながらいろいろ考えることができた。これからも、常に自分のものさしが存在しているということを忘れずに、物事をいろんな角度から見なければならぬと思った。

このツアーを終えて、いろいろ考えて学べてよかった、で終わりにするのではなくて、これからの人生に何かしら生かしていかなければならないと思う。だから、私は、歴史を学ぶこと、思ったことを言葉にすること、自分のものさしではからないこと、の 3 つの焦点を当ててこれからも考えることをやめないでいきたいと思う。

カンボジアスタディツアーで学んだこととこれからの目標

奈良県立大学 地域創造学部 2年

私は今回のカンボジアスタディツアーで本当に多くのことを学べた。それはカンボジアのことだけでなく自分の考え方についてでもある。このツアーに参加する前は、「カンボジアは日本より技術力もあまり無く、経済的にみてもまだ発展途上である。治安が良いとは言えない国である。だから日本の方が恵まれていて、私は幸せだ。カンボジアはかわいそう。」と考えていた。しかしそうではないとこのツアーに参加しているうちに、思えるようになった。それぞれの国によって、それぞれの人によって価値観・考え方は違うのである。カンボジアの人は本当に温かくて優しくかった。街の中ですれ違う人を見たら日本よりはるかに幸せそうであった。日本が幸せでカンボジアはかわいそうなんてことは全くないのである。そう考えることが出来たら、需要のない支援は無くなるのではないだろうか。カンボジアの人々もただ支援を受けるのではなく、本当に必要かどうか判断するべきである。自分達を、自分達の国を成長させたいのであれば自分に厳しくするべきである。カンボジアの人々は本当にカンボジアが大好きで、カンボジアを誇りに思っているということがとても伝わってきた。私達もただ支援するのではなく、その国について深く知ることが大切である。

毎日の意見交換において、当たり前のことであるはずの全く反対の意見があることの大切さに改めて気が付けた。例えば、「ごみ山は不衛生であるし、臭いもあるから駄目なものである。不必要なものである。みんな同じ意見だろう。」と私は考えてしまっていた。しかしみんなと話していくうちに、「近くに家も少なかったし、子供たちは学校に行けている。ごみ山がなくなると、スカベンジャーの方々の仕事はどうになってしまうのか。ごみ山は無くさなくていいのではないか。」という意見が出たことに驚いた。ではそれを踏まえた上でどう良くしていくか。それでもやはりごみ山はない方が良くと思う理由はなにか。自分が今まで考えられなかったさらに深い意見を考えることが出来て嬉しく思えた。自分で考え、意見を交換するのが楽しくなっていた。自分の意見がいかにしっかりしていないか、人に流されやすいのかも分かり不甲斐なかった。これは、私一人では絶対に分からなかったことであるし、メンバーの一人でも真面目に取り組んでいなかったらこのような喜びを私は感じていなかっただろう。メンバーや引率の方々には本当に感謝している。良いメンバーに恵まれたと思っている。

私は今回のスタディツアーの目標としてカンボジアの良い点・悪い点をたくさん知ると設定していた。カンボジアの良い点・悪い点を様々な人・様々な分野・様々な方向からを聞いて結果カンボジアが大好きになれた。だから私は、目標は達成できたと思っている。今回はカンボジアだけであったが、他の国も気になるようになった。自分の知識ももっと増やしたい。今回はカンボジアを深く知る機会としこれからはお互いの価値観を尊重し合い、人生に活かしていきたい。もっともっと幅広い視野を持てるようになりたいと強く思った。

夏期インターンシップに参加して

阪南大学 国際コミュニケーション学部 1 年

私は今回のスタディーツアーで考えて考えて考えまくりました。様々な研修先に行き、それぞれの場所で感じるものがたくさんありました。日本がどんどん技術向上し暮らしやすくなっている時代、私たちの親世代の時代に、なぜカンボジアでは大虐殺が起こったのか何が起こっていたのか。トゥールスレン収容所に行ったとき、事件から生き残った男性に会うことができました。あれだけ大きな出来事なのに、カンボジアの人たちでさえ今でも原因がわからず、教育上でもほぼ伝えられていないという事実、私はすごく驚きました。今では書物、インターネットなど様々なもので外部から情報が得られる時代です。

しかしこのような事実を私は生の声で内部から知ることができました。出来事が起こった場所、起こっている場所、体験した人のところへ自分が行くことがどれだけ大切か、カンボジアに滞在中に気づくことができました。帰国してからもそれはとても感じています。もう一つ私にとって大切なのはディスカッションの時間です。その日感じたこと、考えたことを共有し合うことです。私は性格的に自分の意志を貫くタイプで、どうしても視野が狭くなることがあります。一人で考えたら一通り。みんなで考えたら何通りもの考えがあって、同じところに疑問を抱いていたら、またそこから新たな問題ができました。何を考えたらいいのかわからなくなったり、こんなこと考えたくなかったねという内容もありました。その時にはわからなかった疑問を今でも考えることがあります。行って、見てきたから終わりではなく、これからどう繋げていくか。

日本にもまだたくさん問題があるのに他国について考えるツアーの意味は一体なんなのか。日本に生まれているから考えれる問題で、やはり比べているという言葉が一番当てはまってしまうのか。それとも私の知らない言葉でもっといい表し方があるのか、などたくさんの事を吸収し新たな課題と、一緒に考え抜いた仲間を見つける事ができました。

カンボジアが気付かせてくれたこと

九州大学 21 世紀プログラム 1 年

「途上国を支援して、あなたに何のいいことがあるの？」将来は開発途上国の援助を行い貧困問題の解決に携わりたい、と伝えた私に倫理の教授が言ったこの一言は、私の心のどこかにずっと引っかかっていた。そもそも支援と言いつつ、途上国に行ったことのない自分は彼らの、その土地の何を知っているのだろう。支援や援助の現状はどうか、本当に必要なのか、自分はなぜ支援したいと思うのか、これから自分は何を学べば良いのか、尽きない問いへの答えを探しに、私はこのツアーへの参加を決めた。

プノンペン国際空港を出てカンボジアという未知の地に降り立った私は、どうしてもなくワクワクしていた。モワッとした熱い空気と独特の匂い、4人も5人も一家全員を乗せて颯爽と去っていくバイク、歩道に椅子を並べて暇そうにおしゃべりしている人々、見える全てのものに目が釘付けになった。「貧しい」「かわいそう」日本ではそんな言葉で伝えられることが多いカンボジアとは対照的に、ただ、そこで、今を生きる人々の暮らしがあった。

8日間で様々な研修先を訪問して、支援の現状や必要性、自分の方向性について私が考えたのは、支援には二面性があるということ、そして悪い面を少しでも減らすためこれから学んでいきたい、ということだ。

CIESF の研修では、井戸掘りや中身の無い学校建設など、途上国を支援する際それが押しつけの支援となってしまうことがあるということを知った。金銭や技術を支援することはその国の発展を助けるかもしれないが、時に大きなお世話になったり、状況をさらに悪化させたりしてしまうことさえ起こり得る。研修では NGO や JETRO など日本人側の考え、そして農村や観光省などカンボジア人の考えを両方聞くことができ、その中で様々なことを考えた。そしてこれらを防ぐためには、異なる価値観があることをお互いが理解して、本当に必要なことは何なのか、現地での調査や人々との対話を通して考えることが大事だと思った。必要がある時には、日本の考えが正しいから教えてあげるという姿勢でなく、一足先に発展した日本のノウハウや技術を必要に応じて共有する、という姿勢が求められているのではないだろうか。

また8日間を通して、現地での経験と共に、豊富な知識を兼ね備えることも必要だと考えた。HIV 病棟で聞いたカンボジアの医療の現状や教育水準の現実、JETRO の方にお話を聞いた外資系企業の進出状況など、今回の研修で自分は「いま」何が起きているのかをあまり知らないことに気付かされた。その国に関する歴史や現状を知っておくことは、現地の声に寄り添った支援を目指す時に最低限必要になると思う。学問としての専門的な知識に加えて、世界史や現代社会の教科書に書かれていること以外の、現実をもっと知りたいという衝動に駆られた。これからは大学で授業を履修することに加えて、自分なりに調べたり、今回のように実際に現地に行ったり、積極的に大学の外で学んでいきたいと思う。

このツアーを終えて、最初に積もった疑問が全て解決されたわけではない。しかし研修や参加者との対話を通して、そのヒントを多く得ることができた。そして純粋に、自分はその土地の文化が残る、素朴な国が好きだ、この国のために働いてみたいと思った。たくさんの気づきを与えてくれたこのツアーと関係する全ての方々、本音で語り合ってくれた参加者のみんな、引率の方に心から感謝したい。ここでは書ききれなかった多くの学びや気づきを含めてカンボジアで得たことを忘れずに、今後も自分から行動を起こしていきたいと思う。

「カンボジアスタディツアー」

奈良県立大学 地域創造学部 2 年

私はこのスタディツアーに参加することで、さまざまな公的機関や HIV 病棟、ゴミ山を訪問し、話を伺うことができた。そして、カンボジアは他の国とは違い、独特で複雑な歴史的背景を持つため、疑問や不思議に思ったことを質問する度に自分が想像していたものをはるかに超える回答が返ってきて驚かされた。またカンボジアについて知れば知るほど、日本がどれほど安全で恵まれているのか改めて気づかされる同時に、そのことを当たり前に思っていると感じた。

このツアーの中で、私が最も考えたことは、支援とは何かということである。現在、カンボジアの社会的問題を解決するために、さまざまな国が支援を行っている。その中でも、日本は最大の支援国である。そのため、KURATA ペッパーを起業した倉田さんに日本の支援について話を伺った時に、日本の支援はカンボジアの価値観を無くしてしまっている部分があると言われた。日本が、カンボジアに学校に通ってもらうことを目的に日本語学校を建設したり、働く場所を増やすという目的で日本企業が進出したりすることで、日本の教育や文化の押し付けになっていると。その時、私は、日本の価値観でカンボジアを可哀想と判断し、支援を行うことでカンボジアの独自の文化を壊してしまっているのではないかと感じた。そして、同時にカンボジアに対する支援は、プラスの方向に進んでいるのか疑問に思った。

それから、TAYAMA 日本語学校を訪問し、元気で明るい生徒さんと話をし、大学に通いながら、または働きながら日本語学校に通って、必死に勉強していることを知った。だから、日本語学校を建設することは、この人たちに役立っているのではないかと感じた。しかし、よくよく話を聞くと、日本が好きだからとか日本語を学びたいから、学校に通いたいからなどの理由ではなく、就職活動のためと言われた。日本語学校で日本文化を知るうちに、日本は悪いというよりは良い場所もしくは嫌いというよりは好きと感じているようだった。確かにカンボジアは、多くの海外企業が進出していたり、観光業が進展していたりして、他の語学を話せることが就職するためには必須になってきている。

つまり、カンボジアが他国から支援を受けると同時に他国によって振り回されているのが現状である。そしてカンボジアに支援することで、カンボジアの文化や価値観を奪ってしまったりしている。また、本来の目的ではなく、語学を学ぶための学校と化している。他国の語学を学ばなければいけなくしてしまっているのは、海外企業が進出したためである。

これらのことから、私は、カンボジアが他国の支援に頼りすぎていることも、他国に振り回されている原因だと感じた。言葉で言うことは簡単かもしれないが、支援とは、その国の文化を尊重しながら、問題解決に努め、その国が自立できるような環境と意思を創造することだと思った。

私は、このスタディツアーに参加したことで、国際協力に興味を持った。本当の支援は、単に物資を提供することで解決できる問題ではないと分かったので、支援に対する知識を身に付けて、今後ボランティアや支援活動に参加していきたいと考えている。

「カンボジアに支援は必要か」

同志社大学 法学部 政治学科 3 年

私がこのツアーに参加したのは、発展途上国の実態を自分の目で見たかったからという理由である。高校生のころから、途上国の開発に興味を持ち、大学もそれを勉強できる学校に進学し、実際に開発についての講義を受けたり、ゼミでもそれについて調べてレポートを出す、発表をするなどと勉強はしていた。しかし支援をする側の理論に重点を置いた講義やゼミのため、学ぶたびに支援を与える側と受け取る側のギャップを感じていた。今回、特に受け取る側の現状を見て、自分の「開発」の理解に役立てたく、今回のツアーに参加することを決めた。

プノンペンに到着してホテルまでの移動の際に、車やバイクの多さ、舗装された道路、光り輝く観光施設を見て、カンボジアは途上国と呼ばれているが、かなり発展しているのではないかというのが正直な感想であった。ツアーの前半、倉田さんの価値観の多様性の話、CIESF での日本式の教育をカンボジアに普及させることの違和感、観光省での取り組みを通して、カンボジアに支援は本当に必要なのだろうかと考え込むようになった。衣食住がそろい、さらには教育まで受けられる日本に住んでいると、この状態が幸せだと認識するようになるが、カンボジアには必要ないかもしれないし、例えば教育を先進国が必要だと勝手に認識して押し付けることで、カンボジアの独自の文化を消滅させるに至らないのか。毎夜行われるディスカッションでそのことについて話し合っても、自分の中で答えは見つけられなかった。

「カンボジアに支援は必要ないのではないか」、必要か不要かを定める天秤において「不要」に少し傾いていた状態は、まずプノンペンからシェムリアップに移動する長時間のバスの中で変わり始めた。プノンペンとは異なった郊外での生活を目にしたからである。地面がむき出しとなった道、その上をはだして歩く住民、トタンの屋根を見て、プノンペンとの差に衝撃を感じた。さらに、そこで働く人間を病気にするまでに不衛生なゴミ山、遺跡に多くいた物売りの女性や子供たち、農村での衛生面と量ともに不十分な水の問題に目を見張った。この実情を目の当たりにして、直感で「支援は必要だ」と思った。

では、直感でもなぜ必要だという判断になったのか。この理由を考えたとき、「格差の是正」と「国民の安全の保障」を中心に論を展開させた。第一に格差の是正についてだが、一つの国の中であれまでに生活に差があることは、同じ国の中で生まれたからこそ、選択できない生まれた環境に左右されないためにも、是正すべきだと考える。第二に国民の安全の保障については、政府に言及する。政府は国を統治し、それを維持するために税金を徴収して、それを国民に還元する存在である。経済発展を目指して外資を呼び込むために、そのための整備にお金をかけることも確かに必要だが、福祉や公衆衛生といった国民の生活に直接関わる分野について重視すべきである。特に衛生面では、国内の感染症の蔓延を防ぐといった効果も期待されるはずである。この2つを促進させるために支援をする必要があると考えた。

このように「支援は必要だ」ととりあえずの答えは出したが、そのロジックはまだ軟弱で、また現地住民に完全に寄り添ったものではないものではないので、より考える必要があることは重々承知している。しかし、現地の生活を実際に目にして、自分にとってはこれからの「開発」の研究に貢献させることができるだろうと考えている。豊かな暮らしを確保できる日本にいても、カンボジアでの一週間を振り返って、途上国について考え続けていきたいと思う。